明治・大正期における沖縄県立沖縄図書館、及び同館長伊波普猷の事績

<table>
<thead>
<tr>
<th>著者名</th>
<th>安藤 友張</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>教養研究</td>
</tr>
<tr>
<td>巻</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>号</td>
<td>20</td>
</tr>
<tr>
<td>ページ</td>
<td>1-20</td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>2010-12</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://id.nii.ac.jp/1265/00000338/">http://id.nii.ac.jp/1265/00000338/</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
明治・大正期における沖縄県立沖縄図書館、及び同館長伊波普猷の事績

安藤友張

1. はじめに

わが国における公立の公共図書館の歴史を振り返ってみると、館長職（あるいは副館長職）に就き、図書館の発展に寄与した知識人達が存在する。図書館業務への関与の仕方や度合いは様々であるが、これらの事績を図書館学の視点から評価・分析することは重要である。

この系譜に属する代表的な人物として、「沖縄学の父」と称される伊波普猷（1876〜1947）をあげることができる。伊波は、初代の沖縄県立沖縄図書館（戦前における正式名称）の館長として、戦前期沖縄における公立の公共図書館の設立・発展に大きく貢献した。本稿では、社会教育機関としての公共図書館の館長職を務めた、伊波の事績に着目する。本稿において主な考察の対象としたのは、明治42（1909）年から大正13（1924）年までの館長職を務めた時期である（執託・正規の両方を含む）。この時期の伊波の事績（主として図書館に関連する事績）と同時に、当時の沖縄県立沖縄図書館も考察する。

先行研究をみてもみると、図書館長として、すなわち図書館人としての伊波の事績を図書館学の視点から、当時の社会的背景に照らしながら評価・分析した本格的な歴史研究がなされているとは言えない。沖縄図書館史研究会や山田勉による研究があるが、きわめて断片的な紹介のレベルにとどまっており、彼の事績を明治・大正期における沖縄県立沖縄図書館の実践に関連づけて考察されていない。
いの。本稿では、明治・大正期の沖縄県立沖縄図書館の全体像を可能な限りあきらかにしつつ、日本の公共図書館史において、同館長であった伊波の業績をどのように位置づけるべきかを検討する。

伊波の業績はきわめて学際的で、かつ総合的である。今まで様々な角度から研究がなされてきた。しかし、図書館長としての業績については、伊波自身が図書館に言及した文献が数少ないという資料的制約もあり、今までに研究を実施することが容易ではなかった。本稿では、当時の新聞記事をはじめ、各種の資料（史料）を用いながら、考察をすすめる。

2. 沖縄県立沖縄図書館の設立前史

最初に、沖縄県立沖縄図書館が開設されるまでの同県における図書館史を素描する。

明治12（1879）年、沖縄県の首里と那覇に書籍借覧所が設置された。これが近代沖縄における公共図書館としての最初の施設である。しかしながら、蔵書は難解な図書が多かったことから、利用者数が少なく、翌年廃止された。この書籍借覧所は、明倫堂などの高等教育機関の跡地に設置された。このことからわかるように、公共図書館というよりも、大学図書館・学校図書館としての機能が強かったといえるよう。

明治34（1901）年に、旧藩主（琉球国の最後の王）の尚泰候の遺志によっ
て、嗣子の尚典候から図書館建設資金として沖縄県に対して3,000円の寄付が
なされた。その他、図書館建設資金については、義経金の一般募集もなされた
のである。

明治39（1906）年に、私立の国頭図書館が開館した。これは日露戦争の戦勝
記念事業として設置された施設であり、教員をはじめとする有志の県民からの
寄付によって設立された。同館は、国頭郡出身の戦没者の招魂堂を建立し、
その附設施設として設置された。さらに、明治40（1907）年には、戦勝記念図
書館が設置された。しかし、同館は、県立図書館の開館が決定すると、財政的な理由により、廃止されることになったのである。

沖縄県立沖縄図書館が開館する前の明治42（1909）年の夏、沖縄県を視察した杉山四郎内務参事官は、同県の公立の公共図書館事情について以下のように述べている。「沖縄県にて意見外に感ぜしもの少からざるも共の図書館制度の発達せるには亦一驚を喫せり。同地には郡立図書館と村立図書館の二種あり、多くは皆学校に附属し、中学校卒業生は皆50銭の記念寄付金を為し、図書館の完成に資するを以て沖縄県には巡回文庫を置くの必要を認めず」。

この指摘からわかるように、当時の沖縄県における公立の共同図書館は、日本本土のそれと比較して遜色がなかったことが窺われる。

明治32（1899）年に図書館令が公布され、全国各地に公立の共同図書館が設置される動きが始まった。図書館令は、日本における共同図書館に関する初めての法律であり、これによって図書館設置が急速に進んだのである。さらに、日露戦争後、戦勝記念事業として図書館を建設する動きが全国的に拡大した。また、戦勝以外にも、国家的慶事（例 大正天皇の即位）の名を冠した図書館が全国各地で設立されたのである。各地において結成された教育会が府県立図書館をはじめとする公立図書館を設立する中心的な母体であった。

明治43（1910）年に沖縄県立沖縄図書館が開館するが、他府県における県立図書館の設立年と比較してみると、明治31（1898）年の京都を最初に、明治35（1902）年に山口、宮崎、明治36（1903）年に茨城、大阪、明治39（1906）年に岡山、東京、奈良、明治41（1908）年に和歌山、福島、福井となっている。明治43（1910）年以降に設置された府県立図書館の数は多く、沖縄に県立図書館が設置された時期は比較的早いといえるだろう。

なお、杉山は「巡回文庫を置くの必要を認めず」と指摘したが、沖縄本島の各郡には巡回文庫の設備があり、沖縄県立沖縄図書館が開館してからも巡回文庫は機能しており、昭和の時代に入っても、沖縄県の図書館活動において重要な役割を果たしていたのである。
3. 沖縄県立沖縄図書館と伊波館長の事績 その1

伊波は、明治9（1876）年2月、士族の子として沖縄に生まれた。時を逸さず家庭の中で育った伊波は、学問の道をめざし、明治36（1903）年、東京帝国大学に入学する。同大学に入学する以前の伊波は、史学を専攻することを考えていましたが、琉球語研究の必要性を感じ、自らの専攻を言語学に転向する。

伊波は、東京帝国大学を明治40（1907）年7月に卒業し、沖縄初の文学士として帰郷した。彼は社会的な啓蒙活動に従事すると同時に、沖縄の言語・文化・歴史などの研究に着手する。伊波が沖縄研究をするたためにあたって、郷土資料の発掘・収集は不可欠な活動となる。その活動拠点が、沖縄県立沖縄図書館となるのである。開館当時の同館では郷土資料の収集に重点を置いたが、このような収集方針は今日においても受け継がれている。

日本政府による同化政策（皇民化政策）がすすめられる中で、伊波は主体的・個性的な沖縄文化の価値を強調しようとした。さらに、当時の沖縄社会が抱える諸矛盾を自覚し、その打開のための思想的基盤を伊波は築こうとした。

伊波は、図書館が開館する前年の明治42（1909）年9月、沖縄県庁から同県立沖縄図書館の嘱託館長の辞令を受けた。嘱託とはいえ、伊波は34歳という若さで図書館長の職に就いた。伊波は館長の辞令を受ける前に、同年7月から図書館建設をめざした調査（教育事務調査）を県庁から委嘱された。調査先是山口、大阪、京都、奈良、鹿児島であり、8月に調査が実施された。同年4月、沖縄に府県制が施行されたこともあり、県立図書館建設に向けての動きが活発化した。沖縄県立沖縄図書館の建築時、伊波が設計図を作成するさいのモデルとした施設は奈良県立図書館であった。また、彼は京都府立図書館長の湯浅吉郎からも意見を聴取した。

なぜ、伊波は当初嘱託扱いの図書館長であったのか。比嘉春潮は、当時の県当局が伊波の存在と彼の県民に対する影響力に難色を示したことを理由として指摘している。同様の指摘は宮里栄輝によってもなされている。県民に対する
る思想的な影響を県当局は警戒し、伊波を危険人物扱いした。伊波は以下のよう
に述べている。「赤門を出た翌年、即ち明治40年の夏、沖縄教育会でやった
「郷土史に就いての卑見」という私の処女演説は、今日から見ると史実の誤りも
あり思想の幼稚な所もあって、赤面の種にならないのは稀であるが、菌に角、
当時は言論の不自由な時代であったので忽ち物議を醸して、私は一躍ブラツク
リスト中的人物になってしまった」11。周囲の人々は、伊波が沖縄県庁の高官や学
校の校長などの要職に就くことを期待していたにもかかわらず、「嘆託」という
不遇の地位を伊波は甘受せざるをえなかった。

帰郷したばかりの伊波は、正規であろうと、嘆託であろうと関係なく、図書
館長に就くことよりも郷土研究に専念することが彼の当初の本望であったと考え
られる。「明治39年の夏、赤門を出て、郷里に帰ったとき、私は一の郷土研
究者として一生を終るつもりでいました。郷里の事情は私が一の学究として
立つのを許しませんでした」12という真情を吐露している。伊波は館長職に就
いてから、図書館運営に従事すると同時に、並行して啓蒙活動を行うのである。
明治43（1910）年4月には、伊波は沖縄県立水産学校の教授の嘆託辞令も県庁
から受けた13。伊波は、社会教育のみならず、学校教育の場においても活躍の
場を広げるのである。しかし一方で、伊波は、大正2（1913）年、病に罹り、
数年間にわたって闘病生活を送ることを余儀なくされる。その病が彼の研究に
対する興味・意欲を一時的に失う原因となった。

県立図書館建設であるが、伊波の当初の図書館設置構想と県当局のそれとの
間には齟齬があった。『琉球新報』では、以下のように報じられた。「当局の計
画は最初より一部門計画なるに引き継げ、伊波氏は先進文明国の最新式の組織
に準拠して、婦人部小児部他の数部門に細別して、完全なる形式にじつ計
画を立てたるより、従つて其設計に於て非常なる相違なり」14。

伊波は、自分の理想を追求し、その一方で妥協しながらも、明治43（1910）
年8月に沖縄県立沖縄図書館を開館させた。伊波は、開館式において演説を行
い、以下のように述べた。
明治・大正期における沖縄県立沖縄図書館及図書館長伊波首の事績

「学校に学ぶには一定の時限あり。教師に就て学ぶも又短期たるを免れず。故に如何に学校教育の程度が高くなるも国民の過半数は尚普通教育の期間しか教育を受ける能はず。而して学校を去り教師に離れたる後、自から教育せんとせば殆ど全く図書に頼るの外なきも自己の判断を以て良好の図書を選択し、自己の資材を以て新刊の図書を備ふるが如きは社会の上流に位するものに非ざるよりは到底企画する事能はず。図書の必要彼が如何切にして之を求めむる事此の如く困難なりとせば公立図書館設立の要は学校の設置に比して固より伯仲の間にありと云はざる可らず。兹に於てか欧州先進の諸国は(Strux)に図書館の設備あり。殊に米国に於ては盛に公立図書館を設け国民教育の欠を補へり」

この演説内容から、伊波の図書館思想・社会教育思想の根幹を観取ることができる。伊波は、民衆のための社会教育機関としての公立図書館をきわめて重視したことが窺える。彼は、日本国内の先進的な図書館をモデルとしながら、海外の図書館事情にも通晓し、それらをふまえた図書館建設を志向していたといえよう。

さらに、伊波は次のように述べた。「諸君は学校教育のみで満足せられるか。諸君はまた高尚なる読書の趣味を解せずして一生を送らうとせられるか。諸君は新聞雑誌によって見聞を広げようとはせられぬか。図書館は智識の灯台です。趣味の源泉です」

沖縄県立沖縄図書館が開館した明治末期の日本の学校では、国家主義教育が進行していた。当時の沖縄の学校では、方言（沖縄語）の使用を禁止し、本土の標準語使用を強要する言語教育が行われていた。そのような時代背景の中で、学校教育の問題点を示唆しながら、図書館や書物による教育的効果を強調した。読書という行為は決して知識人だけのものではない。一般公衆のためのものでもあることを彼は説いたのである。

開館当初の蔵書冊数は4,560冊、閲覧席83席、職員は3名であった（館長を含
む。開館後11年が経過した大正10（1921）年9月発行の沖縄県立沖縄図書館『図書館報』の創刊号に、同館の現況が掲載されている。それによると、和漢書は12,085冊、洋書は471冊であり、蔵書の合計は12,556冊である。

施設であるが、普通閲覧室以外に児童室や婦人室を設けている。13歳未満の子供を児童室、13歳以上の男子は普通閲覧室、女子は婦人室で閲覧するように館内規則を定めていた。ちなみに、明治36（1903）年、山口県立図書館に児童閲覧室が設置されているが、それが日本の公立図書館における児童サービスの嚆矢である。沖縄県立沖縄図書館における婦人室設置は、女性に対する読書推奨を目的とした利用者サービスであったと考えられる17。また、当時の伊波は自宅を開放し、「子供の会」を発足させるなど、子供に対する社会教育活動に熱心でもあった。子供に対する読書推奨を図るため、児童室を館内に設置した18。郷土資料（琉球史料）に関しては、特別室扱いの郷土資料室を設置し、同室に配架されている資料を禁帯出扱いとした。これは、郷土資料は「図書館の生命」という伊波の認識に基づくものであるといえよう。

当時の沖縄県立沖縄図書館におけるテクニカル・サービスに目を向けてみよう。同館が編纂した『琉球史料目録』には、「大正13（1924）年2月現在」と記されている。これは、郷土資料目録であり、凡例は伊波が書いたものである19。この凡例によれば、沖縄県立沖縄図書館では「十進分類法」が採用されていたことがわかる。同館の分類によれば、例えば、「歴史地誌　900」となっている。現在の日本における標準分類法である「日本十進分類法」は森清によって、昭和4（1929）年に刊行された。大正期の日本の府県立図書館において、分類法（分類表）は全国的に統一されておらず、各館が独自に分類法（分類表）を作成していた傾向がみられた20。標準分類法ではなく、単館分類法が主流の時代であった。なぜ、当時の沖縄県立沖縄図書館では十進分類法を採用したのであろうか。その主な理由として考えられるのは、伊波自身が京都府立図書館や山口県立図書館など、すでに十進分類法を採用していた先進的な公立の公共図書館を視察し、そこから強い影響を受けたからであろう。京都府立図書館長の
明治・大正期における沖縄県立沖縄図書館、及び同館長伊波音雲の事績

報正吉郎、山口県立図書館長の佐野友三郎など、これらの優れた館長による先進的な実践から、伊波は多くを学んだと考えられる。

一方、目録についても「件名目録」を採用していたことが「琉球史料目録」の凡例の記述内容から知ることができる。

当時、沖縄県立沖縄図書館に勤務していた、元書名の宮里の証言によれば、館長室が郷土資料室を兼ねており、当時の沖縄の知識人が集まるところでもあった2)。館長室が知識人のサロンであり、学術的な人間の交流がなされていたといえよう。さらに、伊波は、明治44（1911）年に沖縄読書会を発足させた。その他、沖縄県立沖縄図書館主催の集会・文化活動として、鶴友会（友の会）による学習会やお伽敷会などが、定期的あるいは不定期的に実施されたのである。

表1は、明治・大正期の沖縄県立沖縄図書館について扱った、当時の新聞記事のタイトル一覧である。タイトルや記事数からわかるように、沖縄県立沖縄図書館の広報媒体としての役割を果たしていたと考えられる。つまり、「沖縄毎日新聞」「琉球新報」の2紙が沖縄県立沖縄図書館の動静を定期的に広く公に伝える、もうひとつの図書館である。同館の入館者数などの利用統計などが随時伝えられている。また、伊波館長が「沖縄毎日新聞」の社友であり、彼の手であった伊波月城が同新聞の記者であったことは、伊波音雲の図書館思想、図書館における実践を沖縄県民に知らしめることに大きく寄与したと考えられる。伊波月城などの記者が沖縄県立沖縄図書館を紙面で積極的に取り上げることによって、同館の存在を世に訴えたのである。なお、比屋根照夫は、「沖縄毎日新聞」について、「きわめて革新的な文化主義的色彩の強い新聞」という位置づけをしている。

一方、公式の沖縄県立沖縄図書館の「図書館報」であるが、伊波は編集させして図書館利用者からの投稿を募っていた。原稿の内容であるが、詩歌をはじめ、ジャンルは問われなかったが、図書館や図書に関する問題を論じたものを中心に求めていた。利用者からの声をふまえた図書館運営を実施しようとした伊波の考えを窺うことができる。

— 8 —
<table>
<thead>
<tr>
<th>年 月 日</th>
<th>タイトル（見出し）</th>
<th>新聞名</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>明治42(1909)年10月13日</td>
<td>図書館問題</td>
<td>琉球新報</td>
</tr>
<tr>
<td>明治43(1910)年7月31日</td>
<td>県立図書館</td>
<td>沖縄毎日新聞</td>
</tr>
<tr>
<td>明治43(1910)年8月2日</td>
<td>図書館開館式、開館式と祝歌</td>
<td>琉球新報（記事2編）</td>
</tr>
<tr>
<td>明治43(1910)年8月2日</td>
<td>県立図書館の開館式、図書館の開館</td>
<td>沖縄毎日新聞（記事2編）</td>
</tr>
<tr>
<td>明治43(1910)年8月3日</td>
<td>県立図書館の開館</td>
<td>琉球新報</td>
</tr>
<tr>
<td>明治43(1910)年8月3日</td>
<td>昨日の図書館</td>
<td>沖縄毎日新聞</td>
</tr>
<tr>
<td>明治43(1910)年8月4日</td>
<td>一日目の図書館縦覧人</td>
<td>琉球新報</td>
</tr>
<tr>
<td>明治43(1910)年8月4日</td>
<td>図書館と趣味知識、図書館の新聞雑誌</td>
<td>沖縄毎日新聞（記事2編）</td>
</tr>
<tr>
<td>明治43(1910)年8月5日</td>
<td>一日目の図書館縦覧人</td>
<td>琉球新報</td>
</tr>
<tr>
<td>明治43(1910)年8月5日</td>
<td>図書館の縦覧者</td>
<td>沖縄毎日新聞</td>
</tr>
<tr>
<td>明治43(1910)年8月7日</td>
<td>一日目の図書館（8月7日-8月14日）</td>
<td>沖縄毎日新聞</td>
</tr>
<tr>
<td>明治43(1910)年8月14日</td>
<td>図書館紹報（8月14日-8月30日）</td>
<td>沖縄毎日新聞</td>
</tr>
<tr>
<td>明治43(1910)年9月5日</td>
<td>8月中の図書館縦覧表</td>
<td>沖縄毎日新聞</td>
</tr>
<tr>
<td>明治43(1910)年9月12日</td>
<td>一日目の図書館</td>
<td>沖縄毎日新聞</td>
</tr>
<tr>
<td>明治43(1910)年9月15日</td>
<td>8月中の児童図書館</td>
<td>沖縄毎日新聞</td>
</tr>
<tr>
<td>明治43(1910)年10月5日</td>
<td>児童の図書館縦覧</td>
<td>沖縄毎日新聞</td>
</tr>
<tr>
<td>明治43(1910)年10月6日</td>
<td>9月中の図書館縦覧表</td>
<td>琉球新報</td>
</tr>
<tr>
<td>明治43(1910)年10月20日</td>
<td>生徒の図書館参観、図書館にて</td>
<td>沖縄毎日新聞（記事2編）</td>
</tr>
<tr>
<td>明治43(1910)年11月3日</td>
<td>10月中の図書館</td>
<td>沖縄毎日新聞</td>
</tr>
<tr>
<td>明治43(1910)年11月11日</td>
<td>図書館に於ける雑誌</td>
<td>沖縄毎日新聞</td>
</tr>
<tr>
<td>明治43(1910)年12月11日</td>
<td>四十七中に関する書籍（県立図書館蔵）</td>
<td>沖縄毎日新聞</td>
</tr>
<tr>
<td>明治43(1910)年12月17日</td>
<td>11月中の図書館</td>
<td>沖縄毎日新聞</td>
</tr>
<tr>
<td>明治43(1910)年12月18日</td>
<td>図書館の臨時休館</td>
<td>沖縄毎日新聞</td>
</tr>
<tr>
<td>明治43(1910)年12月20日</td>
<td>学生の図書館参観</td>
<td>沖縄毎日新聞</td>
</tr>
<tr>
<td>明治43(1910)年12月28日</td>
<td>図書館の閉館</td>
<td>沖縄毎日新聞</td>
</tr>
<tr>
<td>明治44(1911)年1月5日</td>
<td>12月中の図書館</td>
<td>沖縄毎日新聞</td>
</tr>
<tr>
<td>明治44(1911)年2月8日</td>
<td>正月中の図書館</td>
<td>沖縄毎日新聞</td>
</tr>
<tr>
<td>明治44(1911)年3月3日</td>
<td>2月中の図書館</td>
<td>沖縄毎日新聞</td>
</tr>
<tr>
<td>明治44(1911)年3月26日</td>
<td>伊波図書館長を訪問</td>
<td>沖縄毎日新聞</td>
</tr>
<tr>
<td>明治44(1911)年5月4日</td>
<td>4月中の図書館</td>
<td>沖縄毎日新聞</td>
</tr>
<tr>
<td>明治44(1911)年6月4日</td>
<td>5月中の図書館</td>
<td>沖縄毎日新聞</td>
</tr>
<tr>
<td>-------------------</td>
<td>----------------</td>
<td>---------------</td>
</tr>
<tr>
<td>明治44(1911)年7月9日</td>
<td>6月中の図書館</td>
<td>沖縄毎日新聞</td>
</tr>
<tr>
<td>明治44(1911)年8月1日</td>
<td>図書館の訪問時間</td>
<td>沖縄毎日新聞</td>
</tr>
<tr>
<td>明治44(1911)年8月12日</td>
<td>7月中の図書館図書館見返り会</td>
<td>沖縄毎日新聞</td>
</tr>
<tr>
<td>明治44(1911)年9月4日</td>
<td>8月中的図書館図書館見返り会</td>
<td>沖縄毎日新聞</td>
</tr>
<tr>
<td>明治44(1911)年10月15日</td>
<td>9月中の図書館</td>
<td>沖縄毎日新聞</td>
</tr>
<tr>
<td>明治44(1911)年10月17日</td>
<td>沖縄読書会の創設</td>
<td>琉球新報</td>
</tr>
<tr>
<td>明治44(1911)年11月21日</td>
<td>10月中の図書館貸付数</td>
<td>沖縄毎日新聞</td>
</tr>
<tr>
<td>明治44(1911)年12月15日</td>
<td>読書会開催</td>
<td>沖縄毎日新聞</td>
</tr>
<tr>
<td>明治44(1911)年12月25日</td>
<td>図書館の盛況</td>
<td>琉球新報</td>
</tr>
<tr>
<td>明治44(1911)年12月25日</td>
<td>図書館の拡張</td>
<td>沖縄毎日新聞</td>
</tr>
<tr>
<td>明治44(1911)年12月25日</td>
<td>県立図書館の休館</td>
<td>琉球新報</td>
</tr>
<tr>
<td>明治45(1912)年1月3日</td>
<td>沖縄県立図書館の成績</td>
<td>沖縄毎日新聞</td>
</tr>
<tr>
<td>明治45(1912)年1月6日</td>
<td>沖縄教育状況 図書館施設</td>
<td>琉球新報</td>
</tr>
<tr>
<td>明治45(1912)年3月3日</td>
<td>1月中の図書館</td>
<td>沖縄毎日新聞</td>
</tr>
<tr>
<td>明治45(1912)年5月20日</td>
<td>図書館事務調査</td>
<td>沖縄毎日新聞</td>
</tr>
<tr>
<td>大正元(1912)年8月2日</td>
<td>図書館の開館</td>
<td>琉球新報</td>
</tr>
<tr>
<td>大正元(1912)年8月31日</td>
<td>図書館助手採用試験</td>
<td>沖縄毎日新聞</td>
</tr>
<tr>
<td>大正元(1912)年9月13日</td>
<td>図書館休業</td>
<td>沖縄毎日新聞</td>
</tr>
<tr>
<td>大正元(1912)年12月1日</td>
<td>県立図書館の近況</td>
<td>沖縄毎日新聞</td>
</tr>
<tr>
<td>大正元(1912)年12月28日</td>
<td>県立図書館の閉館</td>
<td>琉球新報</td>
</tr>
<tr>
<td>大正2 (1913)年4月6日</td>
<td>青年必読書の選定（県立図書館）</td>
<td>沖縄毎日新聞</td>
</tr>
<tr>
<td>大正2 (1913)年4月18日</td>
<td>青年必読書（其二）（県立図書館）</td>
<td>沖縄毎日新聞</td>
</tr>
<tr>
<td>大正2 (1913)年8月2日</td>
<td>図書館の三周年記念</td>
<td>沖縄毎日新聞</td>
</tr>
<tr>
<td>大正3 (1914)年7月17日</td>
<td>図書館事項</td>
<td>琉球新報</td>
</tr>
<tr>
<td>大正5 (1916)年4月13日</td>
<td>琉球史料展覧会</td>
<td>琉球新報</td>
</tr>
<tr>
<td>大正5 (1916)年7月11日</td>
<td>図書館の時間改正</td>
<td>琉球新報</td>
</tr>
<tr>
<td>大正5 (1916)年9月16日</td>
<td>休暇と図書館</td>
<td>琉球新報</td>
</tr>
<tr>
<td>大正5 (1916)年9月28日</td>
<td>図書館に司書員増員</td>
<td>琉球新報</td>
</tr>
<tr>
<td>大正5 (1916)年12月28日</td>
<td>図書館休館</td>
<td>琉球新報</td>
</tr>
<tr>
<td>大正6 (1917)年2月17日</td>
<td>図書館書籍標準 配布</td>
<td>琉球新報</td>
</tr>
<tr>
<td>大正6 (1917)年10月23日</td>
<td>読書季節 県立図書館の近況</td>
<td>琉球新報</td>
</tr>
<tr>
<td>大正6 (1917)年10月24日</td>
<td>エス語協会設立 沖縄図書館内</td>
<td>琉球新報</td>
</tr>
</tbody>
</table>

※沖縄県立図書館編集・発行「沖縄県立図書館の歩み：戦前篇」1999年のp.15・p.16をもとに本文を作成。
4. 沖縄県立沖縄図書館と伊波館長の事績 その2

高等教育機関としての大学が存在しなかった当時の沖縄において、伊波は社会教育機関としての公立の公共図書館の役割を重要視していた。

伊波は「米国は世界一文明国一番図書館の発達した国であって図書館学のオーソリティなり」と述べていた。伊波の業績には、図書館に関する短冊の評論はあっても、図書館学の範疇に属する専門的な学術論文や著作は存在しない。しかしながら、伊波の図書館思想は、彼自身の学際的な業績をバックボーンとしている。机上の理論にとどまらず、それを実践している。また、大正10（1921）年9月発行、沖縄県立沖縄図書館「图書館報」の創刊号掲載の伊波による「図書館と学校」の内容から、アメリカの図書館学の原書を伊波自身は読んでいたことがわかる。明治・大正期の沖縄県立沖縄図書館の理念は、アメリカの図書館学の影響を受けた伊波自身の図書館思想そのものである。同図書館における運営方針やサービスは、伊波自身の図書館思想を具現化したものである。

しかしながら、当時の伊波の先進的でリベラルな図書館思想は、当時の社会体制と対峙することになる。石井牧は、日本の図書館史を論じるさい、「1910年の転機」という表現を使用し、明治末期から大正期における日本公共図書館史の大きな転換期としての「1910年」を指摘した。それを象徴する歴史的出来事が、明治43（1910）年に起きた大逆事件である。また、同年は沖縄県立沖縄図書館が開館した年でもある。大逆事件は図書館界にも多大なる影響を及ぼした。当時の文部大臣の小松原英太郎は、明治43（1910）年2月、「図書館の施設に関する訓令」（通称「小松原訓令」）を出し、日本全国の図書館（公立の公共図書館や学校図書館）においては、「健全なる良書」を蔵書とすることを推奨した。先述の石井の研究によれば、この訓令の草案を書いたのは田中稲城（帝国図書館長）である。小松原文部大臣は、明治43（1910）年7月には、日本全国の公立図書館長を召集し、館長会議を開催した。小松原は、会議を通して、この訓令を周知徹底させようとした。当時の文部省は内訓の形式で、日本全国の図
書籍内において社会主義関係の図書閲覧を禁止した29)。さらに、小松原は、文部省に社会主任官、府県に社会教育主事を配置することによって、図書の取り締まりを強化したのである。

比嘉春潮は、その著書「沖縄の歳月」の中で、「図書館の施設に関する訓令」などにみられた、明治期から大正期にかけての国家による思想統制が沖縄にも及んだことを以下のように回想している。「大逆事件直後に文部省からの二つの指令がきた。その一つは教員の読書傾向を調査すべしというのであり、もう一つは学校をはじめ公共図書館にある社会主義関係の図書を、閲覧者の目に入れぬところへかくすように、しかもそれを一般に知られぬよう、秘密裏にやれというのであった」30)。

当時、社会主義とキリスト教主義の思想を中心に国家的な弾圧がなされ、沖縄県立沖縄図書館に所蔵されていた社会主義関連の図書も県当局から問題視されたのである31)。それらの分野の図書は公序良俗を乱す悪書とみなされた。

大正10（1921）年12月に発行された同館編集の「図書館報」第2号に蔵書目録の一部が掲載されている。それをみてみると、「マルクス資本論」や「マルクス全集」などの図書が所蔵されていたことがわかる。伊波自身が社会主義思想に対してどのような評価をしていたのかは定かではないが、当該分野の図書を公共図書館の不可欠な蔵書として位置づけていたのではないかと推定される。明治44（1911）年、調査研究のために沖縄を訪れた河上肇との邂逅・親交は、伊波に少なからず影響を与えていく。

伊波は、沖縄県立沖縄図書館の蔵書が偏っているという外部からの指摘に対して、それを否定した32)。伊波は以下のように述べている。「文学は一般的のもので、法律家も商売人も政治家他者誰でも要求するものだから、他の部門よりずっと多くなっている。ところが、法制経済の本とか理学土学の本とかになると誰でも要求するといふ性質のものではないから、ずつと少なくなっている。私は社会の要求を標準にして図書を選定している」33)。伊波の選書方針は、利用者の顕在的及び潜在的要求を基礎としている。図書館学の主要な2つの資料選択
論である「要求論」「価値論」のカテゴリーで考えた場合、強いて言えば、伊波の考えは「要求論」の立場に近いと考えられる。ただし、表1に掲げた「青年必読書の選定（県立図書館）」という新聞記事のタイトルからもわかるように、「価値論」による選挙も実際になされたといえる。一般民衆に数多くの多種多様な書物を読ませ、その知的水準を引きあげるという教育主義の考えが、伊波の図書館思想に内包されていたと考えられる。

当時の沖縄県立沖縄図書館における蔵書構築（コレクションの形成）において、伊波が最も重視したのは郷土資料の収集にあったといえる。沖縄の郷土資料を網羅的に収集し、「県立図書館に保存して、沖縄現地において沖縄の研究がやれる体制」を整備することに伊波は力を注いだのである。王公家や権門名家などに死蔵された史籍・文書類が沖縄県立沖縄図書館に移管され、誰でも自由に利用できるように一般公開することを通じて、沖縄の郷土史研究を推進するようでの基盤を伊波は積えた。これは伊波自身の沖縄研究のためという目的にとどまらず、後進の研究者のためという目的でもあったといえよう。

伊波は、柳田國男との邂逅によって、失いかかった学問に対する情熱を取り戻すことになる49。伊波は、柳田の勧めに従い、大正13（1924）年に館長を辞職し、翌年に上京する。大正10（1921）年、正規の館長に就任するが、その3年後には沖縄県立沖縄図書館から去る結果となった。彼は、「一人の人が永く同じ位置にすわっていると、おしまいにはいきつまって来る。私にも局面を回展すべき時が来た」という真誠を告白した。「おもうそうし」の研究をはじめとする本格的な学究生活を始め、在野の研究者として活躍するのであった。

5．おわりに

沖縄における本格的な公立の公共図書館として、開館した沖縄県立沖縄図書館は、初代館長から第3代の館長まで、当時の沖縄における知識人の泰斗が着任し、戦前期沖縄の学術研究の拠点となった。このような同館について、柳宗

—13—
明治・大正期における沖縄県立沖縄図書館、及び同館長伊波時雄の事績

悦は次のように述べている。「地方的特色のある図書館としては、最後に日本唯一のものでありました。どんな沖縄学者も、この図書館を訪れることなくして、正しい研究を遂げることは出ませんでした。それほど沖縄に関する文献は、完璧に近く、世にも貴重な収集でありました。それというのも三代に渡って沖縄第一の学者が、館長になってくれられたからであります。真剣な学問、伊波時雄、島袋全発の三氏の名は記憶されねばなりません」。しかしながら、歴代館長の尽力によって収集された貴重な蔵書、そして施設も第二次世界大戦の戦火によって灰燼に帰したのである。

さらに、柳は、島袋の後任に無学の官僚が館長職に就いたことを批判し、その弊害を指摘したのである。官僚主義による公立図書館運営は、図書館の発展を阻害するという管轄をもたらした。官僚主義と対峙した、伊波をはじめとする知識人の図書館長は、戦前の沖縄県立沖縄図書館の発展に大きく貢献した。

沖縄県立沖縄図書館の基礎を築いた初代館長伊波の事績は、図書館学の視点からみても高く評価できる。伊波を長とした図書館員たちによる多彩な図書館活動は、他の府県立図書館と比較しても遜色がないといえるだろう。県当局からの財政的支援や図書館運営に対する行政側の理解が不十分であっても、そのハンディに負うことなく、公共図書館としての崇高な理念を掲げ、それを実践した。

伊波の生涯において、図書館長として生きた時代（主として大正期）は、「大正デモクラシー」という言説が示すように、自由主義と民主主義の思想が萌芽し始めた時代であった。しかしながら、当時の図書館界では、国民教化・思想善導の装置としての公共図書館が主流であった。そのような状況下において、伊波は、欧米の先進的な図書館思想から学び、体制が志向した公共図書館像から脱却しようとした。伊波の図書館思想とその実践は、国民教化・思想善導の装置としての公共図書館像に対して批判的な立場をとっていた。

伊波は、図書館蔵書の検閲に屈することなく、資料収集・資料提供の自由を擁護した。これは、今日の「図書館の自由」に相当する思想である。
の自由」が、当時の社会において全く保障されていなかった状況下において、伊波は、その重要性を実践で示した図書館人であったといえよう。

＜付記＞
史料の引用にあたっては、適宜、旧字体を新字体に改め、句読点を付与した。
なお、本稿は、平成21年度九州国際大学経済学部共同研究費（研究課題「戦前期沖縄における伊波普猷の思想とその実践: 県立図書館長時代の事績を中心に」、研究代表者：三島利幸）の成果の一部である。

注

1）一般公衆に開かれた「公共図書館」は、地方公共団体の設置する「公立図書館」と、財団法人などが設置する「私立図書館」の2種に大別される。本稿では、文脈に応じて、「公立の公共図書館」「公共図書館」「公立図書館」という表現を使い分ける。

2）筆者が調査したところ、図書館学分野の専門事典において、「伊波普猷」を項目（見出し語）として収録しているのは、石井敦教授著「図書館学事典（未定稿）」（私家版、1995年）のみである。ただし、これは未定稿の状態のまま公刊したものである。同書では、収録された各図書館人の簡単なプロフィールが記述されているのみで、詳しい事績は載っていない。戦前期日本の図書館界で活躍した人々を取り上げた石井敦教授「図書館を育てた人々　日本編 1」（日本図書館協会、1983年）においても、伊波の事績は紹介されていない。これらの事実から、図書館史の研究分野において、図書館人としての伊波普猷の事績について、十分な研究がなされておらず、かつ評価も定まっていないことがいえる。

3）沖縄図書館史研究会「沖縄の図書館沿革小史」沖縄図書館史研究会、1990年。山田勉『大正期沖縄県の公共図書館政策』『図書館学』No.61、1992年12月、p.33-p.36。山田勉『沖縄における図書館発生史講演』『沖縄図書館協会・会報』Vol.2、No.2、1971年8月、p.11-p.18。なお、図書館学の視点ではないが、社会史研究の立場から、比屋根が図書館長としての伊波の事績を考察した。比屋根治夫『沖縄県立図書館長としての伊波普猷：沖縄図書館協会主催：伊波生誕百年記念講演』『沖縄図書館協会誌』No.8、1977年3月、p.54-61。ただし、これは論文ではなく、講演記録である。比屋根自身も「構想の段階でありますので、まだまだまとま
明治・大正期における沖縄県立沖縄図書館、及び同館長伊波翁巴の事績

ているわけではありません」と講演記録の中で述べており、論文として完成されていない。その他、講演記録として、山下によるものがある。山下欣一「講演 南島における図書館の役割：伊波翁巴をめぐって」「鹿児島県立図書館協議会会報」No.3、1985年1月、p.67-p.72。これらも比屋根同様に、図書館学からの視点に基づく考察ではない。

4）図書館学以外のアプローチによる最近の伊波研究として、以下のような論考がある。並木信久「伊波翁巴と「沖縄学の形成」：個性と同化をめぐって」「京都産業大学論集 人文科学系列」No.42、2010年3月、p.1-34。三笠利幸「伊波翁巴の「旧琉球同源論」をめぐって：初期の思想形成と変化を追う試み」1」「九州国際大学社会文化研究所紀要」No.62、2008年9月、p.42-p.72。

5）ここでは、主として以下の文献を参考にした。
① 田辺朝昭「第6章 社会教育 第3章 社会教育活動の展開 4 「通俗教育」と図書館の設立」琉球政府編「沖縄県史 第4巻 教育」琉球政府、1966年、p.619-p.626。
② 沖縄図書館史研究会「沖縄県」日本図書館協会編「近代日本図書館の歩み 地方編」日本図書館協会、1992年、p.816-p.831。
③ 沖縄県教育会同人「琉球」小澤書店、1925年、p.142-p.144。
④ 玉城盛松「県立沖縄図書館」沖縄県教育委員会編「沖縄県史別巻 沖縄近代史辞典（復刻版）」国書刊行会、1989年、p.240-p.241。

6）杉山参事官談「活気ある沖縄」「冲縄毎日新聞」1909年8月2日、p.2。

7）東條文規「図書館の近代：私論・図書館はこうして大きくなった」ポット出版、1999年、p.33。

8）「県立図書館」「冲縄毎日新聞」1910年7月31日、p.2。この記事によれば、伊波は他県の図書館を巡覧し、比較的規模の小さい奈良県立図書館を沖縄県立沖縄図書館建設のモードとして選んだ。

9）比嘉春潮「比嘉春潮全集 第5巻 日記・他」沖縄タイムス社、1973年、p.550。

10）宮里栄輝「図書館時代の先生：河上肇来県の頃」「人民」1971年8月14日、No.493、p.4。この文章の中で、宮里は次のように記述している。「先生（引用者注：伊波翁巴）は非常に自由主義的な考えで、どちらかというと沖縄県庁という所はたいへん保守的で、沖縄に対しては植民地的な姿勢を歴代県知事がとっていたから、先生が講演を発表されることが県庁は思いもよらなかったようですね。だから就任当時から「危険思想の持ち主」として警戒されていました。」

11）伊波翁巴「空襲について」、服部四郎（ほか）編「伊波翁巴全集 第7巻」平凡社、1975年、p.264。

12）伊波翁巴「琉球古今記 序文」、前掲11）、p.67。

— 16 —
13) 「教授の嘱託」であるが、代用教員（非常勤講師）を意味する処遇と推定される。なお、県立水産高校の教授（嘱託）であったという伊波の職歴であるが、服部四郎（ほか）編「伊波祥彦全集 第11巻」（平凡社、1976年）の巻末に所収されている「年譜」には掲載されていない事項である。国立公文書館所蔵の伊波の履歴書から、この事実を知ることができる。ただし、どのような科目（教科）を担当したのかは不明である。同館に所蔵されている履歴書の内容であるが、尋常中学校校長から明治44（1911）年3月までの伊波の学歴・職歴等が記載されている。この履歴書には、嘱託の図書館長の給与も記載されており、年額（年収）300円となっている。履歴書手書きであるが、筆跡から判断すると、伊波自身による自筆ではなく、那覇区会議長の山崎正貞が書いたものであると推定される。那観区長の候補者の一人として伊波が推薦され、そのさいに当時の内務大臣の原敬宣に出された公文書館のひとつとして履歴書が作成された。ちなみに、那覇区長の候補者は3名推薦され、伊波は第3番目の順位であり、区長に選出されなかった。

14) 「図書館問題」「琉球新報」1909年10月13日、p.1。
15) 「伊波館長の演説」服部四郎（ほか）編「伊波祥彦全集 第11巻」平凡社、1976年、p.237。
16) 伊波祥彦「図書館と趣味詩集」「沖縄毎日新聞」1910年8月3日。
17) 戦前期の日本の公共図書館における婦人室の位置づけや特徴について、定見は存在していない。管見によれば、婦人室を扱った歴史研究は以下の宮崎のみである。宮崎真紀子「戦前期の図書館における婦人室について：読書する女性を図書館はどう迎えたか」「図書館界」Vol.53、No.4、2001年11月、p.434-p.441。
18) 伊波のこのような教育活動については、以下の阿波根による論稿を参照。阿波根直哉「伊波祥彦の教育活動について：「子供の会」を中心として」「沖生研記要」No.7、1976年8月、p.64-p.74。
19) 伊波が書いたとされる凡例の翻刻は「伊波祥彦全集 第11巻」（平凡社、1976年）に所収されている。「琉球史料目録」の「序」は、沖縄県立沖縄図書館の第二代館長となる園崎名安興（ペンネームは笑古）が執筆している。「序」の部分は大正13（1924）年3月3日の日付になっている。沖縄県立沖縄図書館における郷土資料の収集活動を園崎名興による貢献が大きい。なお、戦前期の同館において、郷土資料目録が作成され、刊行されたのは大正13（1924）年と昭和4（1929）年の2回だけである。
20) 服部金太郎「図書館分類法の100年略史」「現代の図書館」Vol.7、No.1、1969年3月、p.17-p.25。
21) 「宮里栄輝回顧録」1：伊波先生の思い出「琉時潮」Vol.1、No.1、1974年1月、p.59。大正13（1924）年12月19日付の「沖縄朝日新聞」によれば、伊波らが発起人となって、当時の知識人を中心にメンバーとした郷土研究会を発足させる計画
が進められていたことが報じられている。「郷土研究機関 生る」「沖縄朝日新聞」1924年12月19日。
22) 比屋根照夫「沖縄県立図書館長としての伊波喜雄：沖縄図書館協会主催：伊波喜雄生誕百年記念講演」『沖縄図書館協会誌』No.8、1977年3月、p.56。
23) 「昨日の図書館」「沖縄毎日新聞」1910年8月3日、p.2。
24) この「図書館と学校」の翻刻は「伊波喜雄全集 第11巻」（平凡社、1976年）に所収されている。
25) 石井敦「1910年の転機」「日本近代公共図書館史の研究」日本図書館協会、1972年、p.43-p.66。
26) 図書館学の視点から大逆事件について考察した先行研究として、小黒による論考がある。小黒浩司「大逆事件と図書館」「図書館界」日本図書館研究会、Vol.41、No.6、1990年3月、p.280-p.287。
27) 「官報」1910年2月26日、p.517。山口は小松原訓令の歴史的意義として、「通俗図書館に関する国家的標準を示す」という点を指摘した。山口源次郎『近代日本図書館思想史研究序説：成立期図書館思想の構造とその特質に関する一考察』名古屋大学大学院教育学研究科1982年度修士論文、p.100。さらに、以下の文章からわかるように、小松原は自然主義文学や社会主義思想の書物を「不全」とみなし。「現今社会の風紀を壊敗し、青年の子女をして自然主義に流れ、社会主義に心酔するに至らしむものは其原因類々ありとの雖も、其害不全なる読物より更甚しさはなし。国家社会の安寧秩序を破壊するが如きものは素より内務省に於て之が出版を禁止し居れり。」（『小松原英太郎君事略』1924年、p.114。小松原英太郎君伝記編纂実行委員会編輯の大空社から刊行された復刻版からの引用）。
28) 小松原訓令にみられる図書館政策・社会教育政策については、「内務官僚的発想」（山田朗『解説』『小松原英太郎君事略』大空社、1988年、p.3）という評価がある。その一方で、『上からの強権的な普及策であったのではなく、一般公衆の要求を一定の範囲でみとり、一般公衆の支持を獲得する方法ですすめるることを内にふくんでいた』（前掲 山口源次郎「近代日本図書館思想史研究序説」、p.104）という評価もある。このような小松原がとった教育政策の二面性について、今後研究を深める必要がある。
29) 神崎吉の研究によれば、社会主義関係図書の閲覧禁止令については「官報」に掲載されていないので、「訓令」ではなく、「内訓」という位置づけであった。以下の文献を参照。神崎吉『大逆事件 3』あゆみ出版、1977年、p.244。
30) 比野春潮『沖縄の衰退：自伝的回想から』中央公論社、1969年、p.40。
31) 宮里は以下のように説明している。「図書館（引用者注 沖縄県立沖縄図書館）の蔵書に、社会主義の本が多いということで県会で問題になり、議会によばれて色々と聞きかれたことがあるんですが、それほど社会主義の本が多かったし、原書
も相当ありましたね。」宮里栄輝（ほか）「＜座談会＞伊波普猷と現代：その今日的意義を考える」「新沖縄文学」No.31，1976年2月，p.28。この座談会の中で，宮里は，当時の伊波が社会主義に理解と関心があったと指摘している。
32）伊波普猷「対話」，服部四郎（ほか）編「伊波普猷全集 第11巻」平凡社，1976年，p.287。
33）前掲32）、p.288。当時の沖縄県立沖縄図書館における資料収集方針を考察するためには，伊波が「沖縄朝日新聞」に寄稿した「図書館購入方針」を分析することが重要な手がかりとなる。大正13（1924）年に発表された同資料を筆者は探したが，見つけることができなかった。国内の図書館では，大正13（1924）年発行の「沖縄朝日新聞」を欠号なく，完全に所蔵している館はなかった。「伊波普猷全集第11巻」（平凡社，1976年）の著作目録において列挙されているが，同全集の掲載者も未見である。ところで，資料（史料）の乏しい戦前期の沖縄史を研究するさい，新聞は基礎資料であり，かつ第1級資料として扱われている。そのような中で，当山昌直は「沖縄朝日新聞」などの稀少な地方紙を収集する活動を行っている。以下に，文献を参照。「沖縄県文化振興会編「沖縄県史研究集会17植物標本より得られた近代沖縄の新聞」沖縄県教育委員会，2007年。この文献にも上記の伊波が著した記事は収録されていない。
34）大城信裕「第2節 教育と知識人の動向」「沖縄県史 第5巻 各論編4 文化1」沖縄県教育委員会，1975年，p.860。
35）柳田は以下のように述べている。「伊波君は，「古琉球」が島の人に充分に理解してもらわず，又図書館長として社会教育の講演その他に忙殺され，研究から遠ざかっていた。その噂は東京にまでこかえていたので，伊波君に逢い，学問するよう，すすめて来ようと思い立ち，沖縄に渡ったのは大正10年1月のことであった。」柳田國男「序 伊波普猷君のこと」「伊波普猷選集 中巻」1962年，沖縄タイムス社。
36）前掲32）、p.292。
37）柳宗悦「琉球の人文 柳宗悦選集 第5集」春秋社，1954年，p.246-p.247。
38）前掲37）p.247。
39）大正期において，伊波と同様に，図書館における資料収集・資料提供の自由を重視した人物として，三宅雄二郎をあげることができる。三宅は以下のように述べていた。「図書館は最も自由な学校である。（中略）図書館には色々の書物を備けて置かなければならない。危険思想の書物であろうと，又猟奇の書物であろうとも，何でも彼でも備えて置き，さえして之を善く用ゆる人があつたならば，読まして差支えない。若し皆が善く用ゆるのならば何なん書物でも公開して宜いのである。危険思想でも，猟奇の書物でも，何でも放して置いて宜いのである。」（三宅雄二郎「図書館の善用悪用」「図書館雑誌」No.25，1915年12月，p.187-
明治・大正期における沖縄県立沖縄図書館及同館長伊波哲郎の事績

p.194。引用はp.188及びp.193）。なお、明治・大正期ではないが、米国占領期の沖縄の公共図書館を「図書館の自由」の視点から考察したものとして、以下の前田論文がある。前田稔「占領期沖縄における八重山琉米文化会館と図書館の自由」『東京学芸大学紀要 総合教育科学系 1』Vol.61、No.1、2010年2月、p.73-p.90。